

2012年 2月17日・「陸奥新報」では

心に刻む生涯の追憶

田澤ちよこ詩集「四月のよろこび」 小笠原茂介

第一章『冬物語』から第三章まで続く長編詩集には、冬の雪や四季の花々など（〈秋の花展〉）、自然のさまざまな明暗が多彩に表現されている。作者の長い生涯の追憶も、幻も夢も。

冒頭詩〈冬物語〉の「あなたの中の暗い物語」や、〈お花見〉の幼時回想も懐かしい。

〈夕〉は艶麗な佳品。街の小路、扉を開けると、カウンターの向こうに「モディリアーニが描いた女」、

カウンターの向うに ひとり

黒いドレスに面長の顔が浮き上がる

右に小首を傾げ

細い撫で肩の上で 青い眼が微笑っている

さらに詩の舞台はユーラシア大陸の涯にまで広がる。〈金鮎とオリーブ〉では、マドリッド都心のエスパーニャ広場に建つセルバンテスとドン・キホーテ群像、その足許に散らばるオリーブの実が回想されるが、はて、あそこにオリーブの木が立っていたかしら？ 不注意な旅行者としてのぼくは、その緻密な観察力に脱帽するばかりである。この旅は、ぼくもまだ訪れたことがないトルコのキャパドキアやエフェソス、トロイなどにまで広がる。（〈旅のスケッチ〉、ルーマニア〈望郷のバラードⅠⅡⅢ〉）。

〈青いバイクで〉は、急逝された前陸奥新報社文化部長阿保隆夫氏の葬儀に颯爽と登場した子息の姿が印象深い。

〈忠霊塔〉は弘前市茂森禅林街に建つ史跡名所。これにまつわる敗戦後の挿話（＝マッカーサーの破壊命令をみごとな謀で防いだ）は意味深く感動的。

最終詩〈見たことのない花〉は、集中最高の秀作。その花の名はノモンハン桜。「あとがき」には、「三十六歳で歩兵中隊長としてノモンハンの戦場に散った父への思い」と記されているが、今日ではこの「事件」のことは、もうわれわれ老齢のものしか知るまい。

「中国東北部の北西辺、モンゴル国との国境に近いハルハ河畔の地。一九三九年五月から九月中頃まで、日ソ両軍が国境紛争で交戦、日本軍が大敗を喫した。」（広辞苑）

こちらは花の合間に伏せ

花を蹴散らしての戦い

あちらの戦車は花に踏み込んで

頭上から銃を撃った

国境のホロンバイルで父は戦死した

ノモンハン桜咲く高原は

無数の兵の血潮に染まった

.....

何千もの遺骨はそこに留まり

郷愁の草花は いまも

傍らに添って咲くという

あたかも血潮に染まったかのような花の鮮烈な色と香りが、まだ幼なかつた作者を通して、われわれ読者の

心にも深く刻みつけられる。

(詩人・ドイツ文学者 弘前市在住)

と紹介されています。